

昭和二十三年九月二日第三種郵便物認可  
平成十七年九月一日発行  
通巻九七三号（毎月一回一日発行）

# 京鹿子



9月号

近詠

登山口  
丸山佳子

光陰は矢ビルを斜に去ぬつばめ

トンネルは山神の胎汗しづむ

万緑に達筆すぎる火の用心

軟派よし硬派なほよし登山口





道よぎり人おどろかす蛇立派  
いつ来ても蜻蛉好みの池さざ波  
立葵このご器量でまだ独身  
三步引き一休さんの白紫陽花  
市になつてどんなお気もち青芒  
残り鴨動じぬ一石投じても



近詠

清響集  
豊田都峰

その五十三



空梅雨やビルはたに間を深かめる  
涼響や溪水のまた段を落ち  
夏木立真正面に比叡とがる  
朝顔の紺をかがげて辻を守る  
一本の向日葵頭に雲のなし  
四方の風鎮め向日葵のま昼時

夏帽子途中下車して野にまかす  
すがりゐる空蟬に憑く風もなし  
夏草やわが影一筋にも乗らず  
夏草を踏む一本の道となるや  
たちまちに座を占め御所の蟬名乗り  
もうひとつ病葉舞へば座を立たん  
ほととぎすまだ遠音なる山暦

「俳句十月号」作品十二句出稿

「俳句四季十月号」巻頭三句出稿

## 秀華採集

たんぽぽの絮の行方や国生まる

木村 真魚奈

新しい地を目指しての絮の旅立ちであるが、着地した所に「国生まる」とはたいへん良い発想である。単に一本だけの大地ではなく、そこに命の新しい活動があると、連想を豊かに駆使した手柄とする。

沙羅の花母の祈りは底知らず

森 道子

あきるまで桜に埋もれ転生せむ

荒川 美邦

前句・沙羅の花の季語がたいへん効いている。一日花は命のあり方を象徴していると考えると、命を授ける立場の母の祈りは深い。後句、「転生」はあまり大袈裟に考えるよりは、他の自分に、ぐらいに解釈した方がよいようだ。人間は捨てられないので。

鈴鹿 仁

灼け道

からすにも眼尻から老け大暑かな  
灼け道に男ごゑしてをとこ老ゆ  
茂るだけ繁り風騒あふれさす  
空蝉のねむる木となり夜の白さ  
蝉穴の逆の出口は大海洋  
斥候の蟻機敏さの細身なる  
夏陽落つ水平線は他国なり

近 詠

宇都宮滴水

空 蝉

廃線のその先つなく蝉しぐれ  
空蝉や細き枝ほど縛めらる  
大青田里ふくらます風となり  
流灯の後尾はげます渦となる  
不知火や一兵卒の声溺る  
空蝉にほどよき風となり昏るる  
誘ひ合ふ流灯のあり尚愛しかな

# 神麓集



若沖の瓢箪くびれぶらさがる  
 伝統のスタイル踏んで糸瓜垂る  
 若沖と琳派きらめく天高し  
 秋の朴鈴木其一の尾長鳥  
 さまざまの技法で描く諸鶏

林 日圓

哲学の道 北村 香朗

哲学の道ひとり来て余花に逢ふ  
 老鶯や先師の句碑へ坂きびし  
 哲学の道疏水への著莪置  
 花筏第二疏水は北目指す  
 哲学に無縁や余花の道終る

山 薄 暑 丸 山 冬 鳳  
 端 近 かが何より友の庭若葉  
 新 松 子 樹 下 星 霜 の 笹 ほとり  
 里 苺 芬 々 句 座 の 手 皿 盛 り  
 花 終 えて な か で も 水 仙 草 仲 間  
 山 薄 暑 た し か め 合 つ て 同 い 年

雨のせて明るき湖や行々子  
 老鶯や雨後の雲吐く阿蘇五岳  
 東の間の浄土あかりや梅雨没日  
 闇に雨たゝんで叩く遠水鶏  
 晴れすぎてどこかが昏し茂り山

遠水鶏 藤岡 紫水

山田 耕子

聲かけて送りし駅や星凍つる  
 発車を別れの列車追ひつゝ月しぐれ  
 古郷をかざし故郷後に氣笛凍つ  
 手をかざし故郷後に氣笛凍つ  
 なほ一步列車に追ひつき聲噎す

女三界終の住家の濃あぢさゑ  
 蓮ひらく三文の得賜りて  
 嘘ついて早寝す暗を暮笑ふ  
 待つ人の来たらず水蓮花を閉づ  
 分身の杖も古りたり夕焼す

吉田 多美



# 神麓集



伝へ古るかくれの里の青しぐれ 角 直指  
 人尋ね来て茉莉花に日照雨止む  
 藤は実に火難の神として知られ  
 照葉してダイヤモンドの名にばら咲けり  
 文化圏ここにも及び薔薇咲く

婚の笛 襦 寝 瓶 史  
 退職後遍路一途の金の納札  
 花蜜柑杖の憧る大師道  
 睡蓮や雑魚鬪ぎ合ふ城の影  
 花菖蒲国の名負ひて彩競ふ  
 婚の笛蛇は傷持つ脛もたず

行春やほどく形見の紺緋 丹生をだまき  
 さくらんぼの花はまつ白岩木山  
 紫蘭咲く尼門跡の白き御手  
 唐招提寺修理の槌音鑑真忌  
 ピンク着ておのれを奮ひ立たす夏

単衣着て心も軽く身も軽し 岩崎 憲二  
 今年又軒を借ります燕来て  
 更衣鏡を一寸斜に見る  
 消ゆる迄邪心は沸かず虹の橋  
 最早や初夏同じ此の世で幸不幸

子燕の口に余りしもの跳ねる 高橋 千美  
 干若布紙の音する日暮かな  
 松蟬や庖瘡塚は石三つ  
 竹皮を脱ぐ音のこる古机  
 豆腐屋のラツパに起てり系取女

老人ホーム交代制で水をまく 山尾 和子  
 富士すでに梅雨の最中のもやこめし  
 筍はむかしの重さなわで結び  
 松蟬の鳴き止み風のとまりけり  
 青虫を捕えて蜂の飛び立てず



# 京鹿子集

## 豊田都峰選

宇治 木村真魚奈

たんぼの絮の行方や国生まる  
桜散る瀑音に危気なかりけり  
屋根替の三日三晩の長梯子  
夏立つやカレーライスを辛口に  
鍬の柄に憩ふ農夫や揚ひばり  
天の川戦時遺品の聖書持つ  
たましひを深山へ返す沙羅の花  
植ゑられて五十年忌やぐみ熟るる  
沙羅の花母の祈りは底知らず  
若楓踏みゆく影のゆれどほし  
あきるまで桜に埋もれ轉生せむ

八木 森 道子

城陽 荒川 美邦

ポケットを花のかたちにして帰る

目薬をさし陽炎へのりかへる

風化佛へついでのやうに絮たんぼぼ

落味噌やパステルカラーの湖北岬

黒楽の底に潜みし青葉冷

江戸切子若葉の翳を満たしけり

日もすがら神田囃子の湧き継ぎて

風鈴の音色さだめの茶髪連れ

三四郎池騒がせて五月祭

突つつけば蛙の腹の鳴くばかり

蓮浮葉ほつこり睡る二度童子

千葉 河内 桜人

伊藤 希眸